昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成10年6月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

## No. 319

1998 JUNE

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

# 1999年ＨＡＪ登山隊員募集

## 未踏峰（カバン 6,717ｍ）

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000ｍ級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000ｍ級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1．期　　間:1999年９月18日～11月１日(45日間)
2．募集人員:６名程度
3．負 担 金:95万円

## チョム・カンリ（7,048ｍ）

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1．期　　間:1999年７月20日～８月25日(37日間)
2．募集人員:10名程度
3．負 担 金:80万円
4．〆切り:定員になり次第

## ニンチン・カンサ（7,206ｍ）

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に３隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

ＨＡＪの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1．期　　間:1999年７月20日～８月25日(37日間)
2．募集人員:10名程度
3．負 担 金:80万円
4．〆 切 り:定員になり次第
5．申し込み:ＨＡＪ事務局まで

**表紙写真**

昨年は天候に恵まれず無念の帰国となった。今年こそはと希望を胸にリシガンガのチャラン・バドゥカの丘に慰霊碑を設置した後、サトパント湖を目指しマナ村を出発する。キャンプ地マジナ（4,560ｍ）からサトパント氷河のモレーンの丘に登ると逆光の中、４年ぶりにニルカンタ北壁と再会する。振り返ると氷河対岸にチャウカンバ峰（7,138ｍ）が輝いていた。（なおこの山を地元ではバドリナートⅠ峰Ⅱ峰Ⅲ峰とも呼ばれている）　（松山昭）

# ヒマラヤ No.318


1．追悼－フカム・シン氏
9．ヤル・ツァンポ河大峡谷の踏査
11.「ヒマラヤ」表紙写真一覧表
15. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉
18. 8,000ｍ峰トータル獲得標高1997
21. 1998年サマー・キャンプ　ニンチン・カンサ峰登山計画
24. 事務局日誌

# 追 悼

## フカム・シン氏

(HUKAM SINGH)

1938.2.26－1998.4.4

享年60歳

# ガンガの流れに眠れ

稲田　定重

永年付き合ってきたフカム・シン氏の病気を知ったのは、1998年２月７日に氏から送られて来た一通のＦＡＸだった。１月末に体調が悪くなり、２月第一週に診察を受けたところ肝臓ガンと告げられたとのことだった。

１月中旬、私は久しぶりに訪ねたカトマンズからデリーに入った。フカム・シン氏がいつものように笑顔で空港に迎えてくれた。少し声が小さく顔色が冴えないのが気になったが風邪とのことであった。翌日ホテルで検温をし、持参の風邪薬を差し上げた。帰国後、人間ドックに入る予定をしていたので氏にもたまにはドックに入ってあちこち調べてもらった方がよいとアドヴァイスしておいた。ＩＴＢＰを辞めてからも氏の日常は殺人的に多忙だったからである。

ガンとの知らせは衝撃的であった。知らせは会員の能勢真人氏（愛媛大学医学部教授）にも来ていた。シッキム・ヒマラヤ遠征以来、氏とフカム・シン氏の交友が続いていた。

日本の国立ガンセンターで治療するのがベストであるとの医師の助言があり、来日治療を希望していた。直ちに能勢氏と協議し、出来るだけの診断データをデリーから送ってもらった。データをもとに検討し、フカム・シン氏の心情を思い、その希望に沿うべくガンセンターでの治療の道を探ることにした。

### 支援活動と来日

忙しい日々がはじまった。ＨＡＪ事務局で山森専務理事・寺沢玲子氏と協議し「闘病を支援する会」を結成し、来日を受け入れることと、最大限のケア体制をしくことになった。

会の発起人には、氏との交友関係を考慮し、北海道から広島までの各地区のＨＡＪ会員など11名に電話し、お願いしたがいずれの方もただちに快諾していただいた。有り難いことであった。

発起人の方々に先ず支援募金活動の文書をお送りし、次いで遠征関係でフカム・シン氏にお世話になった方々を中心に趣意書を送らせていただいた。ガンセンターの入院は沢山の人が待機の状態でおり、まして外国人ともなれば直ぐさまの受入れは困難な状況だったが、能勢氏や愛媛大学関係者のご尽力により、奇跡的にも早期の受入れが実現することになった。

来日期間中の全面的なケアは寺沢さんが担当してくれることになった。陰に旦那様の深いご理解があったことを記したい。

３月４日の早朝、成田に着いた氏は車椅子に乗って出てきた。来日には氏の深い思いが込められていたように考えられてならない。

▼一九八五年初来日し、日光でスキーを楽しむ

「次に生まれるときは日本人に」と口癖のように言っていた氏、「このような形で日本を訪れるとは思いもよらなかったけれど、それでも私は日本の友人たちに会えることを神に感謝する」との手紙を送って来た心中はいかばかりだったろうか。

3月6日にガンセンターに入院し、詳細な検査を受けたが、肝臓機能の障害は思った以上に進んでいて、ガンの治療に入ることは出来なかった。加えて食欲もほとんど進まず、明らかに体力の衰退が日を追って深まって行く様子が見えた。

寺沢さんを中心に毎日手厚い看護が続いた。娘のアルパナさんも付き添ってのケアだった。

会員をはじめとして、沢山の友人たちが見舞いに訪れてくれた。旭川の松山会員は4日間も病床に通った。インド大使館からも公使がお見えになった。病気と懸命に対峙する氏にとって、これらの真心はどんなに嬉しいものであり、励ましになったか計り知れないものがある。

しかし、病状はいっこうに好転せず、決断を迫られた。ガン治療に入ることは当分不可能であり体力の衰えを考えるとこれ以上異国の病床に暮らすことは好ましいものではないとの医師の判断があった。

医師を交えフカム・シン氏、アルパナ、能勢氏が協議した結果、日本での治療を打ち切り、帰国することが決定された。

3月15日、来日時と同じように車椅子に乗り数人の会員の見送りの中、氏は故国へと帰って行った。来日の時とは別人のように頭髪に白いものが増えていた。

## 急　逝

長旅に疲れた氏ではあったが、自宅に落ちついた氏は家族に囲まれて再び闘病への意欲を出したようであった。日本から送られる特製のジュースは大変気に入り、また、アーユルヴェーダの伝統医療も受け元気を回復されたように見受けられた「秋には一緒にトレッキングをしよう」というようなことも送ってよこした。

しかし、それも束の間のことだった。4月2日国立医学研究所病院に急遽入院との知らせが届いた。そして血の混じった腹水を4リットル採取し輸血もしたとの知らせが続いた。けれど、腹水を抜いてから気分が良くなったとの氏のサイン入りのＦＡＸが来て少しは安心した。

「会いたい」という意味が記されていた。ただならぬ気配が文面に読み取れた。

よし、デリーに行こうと決心した。娘の美香子も行きたいとのことで、ただちに出発準備にとりかかった。5日の便が何とか取れた。ビザはいつでも出掛けられるように持っていたし、航空券も幸い所持していた。

4月4日午前11時、国際電話が入った。娘のアルパナの悲痛な声が聞こえてきた。今朝早く父が亡くなったとの知らせであった。何で、こんなに早く、悲報に声も無く受話器を握りしめていた。とりあえず寺沢さんら2、3の方々に知らせを入れたが、みな呆然とするばかりであった。

どうして待っていてくれなかったのかと思った。私たちがデリーに来るということを聞いてしきりに喜んでいたというのが今はせめてもの慰めであった。

## 葬　送

二人でフカム・シン氏の思い出を語り合いながらの機中はやりきれないものだった。空港には息子のヨゲッシュ、ラジェッシュ、そしてアルパナが待っていてくれた。声も無く手を固く握りしめるだけだった。真っ直ぐ空港から家に駆けつけ奥様にお目にかかった。

家族中が涙していた。私たちを迎えて一気に悲しみがあふれたのだと言う。遅くまで思い出を語

りあい、今後のことを話し合った。「偉大な父」の喪失をいまさらながら実感した。

翌日の早朝、デリー郊外にある火葬場にお骨を拾いに家族とともに出向いた。長男のヨゲッシュは頭を剃り、白衣を身にまとっていた。

幾つも並んだ火葬の炉の一つにフカム・シン氏が横たわっていた。2昼夜燃えた亡骸は未だ冷めやらず、氏の情熱を思わせた。

病院からここまで、遺体はＩＴＢＰと陸軍の兵士に護られ、花におおわれた葬送の列をもって運ばれたという。

ヒンズーの作法にのっとり、周囲8か所に灯明をかかげ、香を焚き、牛乳と香料をふりかけ、経を唱え、お骨を一つ一つ壺に拾う。

17年前、氏と初めて会ったのが自分であり、今また氏の最期の場に立ち会う自分の因縁を思うと万感の思いがこみ上げてくるのをどうすることも出来なかった。ひたすらに無常をかみしめるだけだった。

お骨は4つに分けられた。一つは母なる川ガンジスへ、一つは聖なる湖マナサロワールへ、一つは家へ、そして最後の一つは日本の山々へ還ることになった。

誰よりも日本を愛し、日本人以上に日本人を思わせた氏が「生まれ変わる時は……」と念願した日本の土になることはご家族の願いでもあった。

お骨とともに私たちは2台の車に分乗してガルワール・ヒマラヤの麓にある「神の門」を意味する聖地ハリドワールへと向かった。ハリドワールでガンジスは平原に躍り出て、インドの大地を潤しながら遠くベンガル湾へと注ぐ。

ハリドワールについたのは夕暮れ迫る頃だった。

▼病床にてＨＡＪ会員と（左はアルパナ嬢）

折から12年に一度の大祭クンブ・メーラを数日後にひかえて無数の巡礼者がインド中から訪れていた。

最も聖なるガートといわれるハル・キ・パウリの前にはガンジスが激流をなして流れていた。

突き出たガートで祈りの儀式を行い、遺骨は勢いよく流れる聖河に撒かれた。

ガンジスに還ることは氏の遺言であったという。インド亜大陸に生を受けた何億の人たちと同じようにフカム・シン氏もまたガンジスに昇天して行った。水の流れをただ凝視していた。

☆

こうして、氏との別れは終わった。1981年の出会いから今日にいたるまで、数知れぬ思い出を共につくり、ＨＡＪの仲間とともに一つの輝かしい登山史を築いた偉大なる魂に会うことはもう出来ない。

「ありがとう、フカム・シンさん」、遺骨を抱き機上からインドの大地に手を合わせ、別れを告げた。

（ＨＡＪ　理事長）

# フカム・シン氏の葬送に参列して

寺沢　玲子

4月16日、ニューデリー郊外にある故フカム・シン氏自宅そばの公園で、氏との最後の別れの儀式“ティルヴィ”がとり行なわれた。“ティルヴィ”とは、この世を去ってから13日目に行なわれる葬送で、その名称は“13”を意味する。“ティース”に起因している。ヒンドゥの世界では、女性は身内と云えども火葬にも、また聖なる川ガンジスへの遺灰流しにも立ち合う事は良しとされておらず、

▼左からヨゲッシュ、アルパナ、ラジェッシュ

▼フカム・シン氏未亡人ウシュパさん（右）

女性にとっては、“ティルヴィ”が初めて亡き人の葬送に立ち合える場となる。

外気温38℃を記録したこの日、親族の男性やフカム・シン氏の友人達の手で建てられた簡素な日よけの下で、葬送はとり行なわれた。ここでも男性と女性は同席する事なく、分れて地に座していた。小さな壇上に、花束に囲まれ、マリーゴールドの花輪で飾られたＩＴＢＰの制服に身を包んだフカム氏の遺影とヴィシュヌ神の額が祭られ、かたわらでプジャリ（僧侶）が故人の生前の功績を讃え、ヒンドゥの教えを説く。生あるものにはいつか必ず終わりが来る、生前に善行を積む事、他人との争いは後悔の元である、他人の頼みに対する断りの言葉は極力避ける事等々、生ある我々に対する戒めの言葉は宗教のワクを超えて共通するものであった。プジャリの説話は遺された家族への慰さめといたわりの言葉で結ばれた。

ＨＡＪ理事長稲田定重氏の弔辞をフカム・シン氏長女アルパナ・パンティさんが代読すると、ＩＴＢＰ関係者達からすすり泣きの声が漏れた。次いでフカム氏の陸軍従軍時代の上司による若き日のフカム氏の思い出が語られた。陸軍時代の氏は、決して“出来ない”と云う事のない、皆に頼られていた人物である事、“山羊”の異名をとる程山野をかけ回る事が並みはずれて速かった事など、後年ＩＴＢＰでの統率力や登山界での活躍を裏付けるような思い出話であった。ＩＴＢＰで共に過ごしたＳ．Ｐ．チャモリ氏は、ＩＴＢＰの登山活動発展に多大な功績を残したフカム氏を讃え、あまりに早い逝去を惜しんでいた。

約２時間半に及ぶ葬送の儀式の後、故人の冥福を祈りながら参列者に昼食がふるまわれた。

平日と云うこともあり、参列者はデリー周辺在住者に限られたものの、Ｍ．Ｓ．コーリー氏や故サリーン夫人、車椅子で参列したアルワリヤ氏を始めとするインド登山界の大御所や、元ＩＴＢＰ総監Ｒ．Ｋ．ワデラ氏などの参列を見、皆名残り惜しそうにフカム氏の遺影を見つめて肩を落としていた。なお、偶然ニューデリー出張中のＨＡＪ会員でもあるＴ．Ｈ．Ｉ代表取締役田中祥治氏も、Ｎ．クマール氏と共に参列、親日家だったフカム・シン氏らしい葬送となった。

4.16 ニューデリーにて（ＨＡＪ常務理事）

# 最初と最後の登山に感謝

沖　允人

1985年のサセル・カンリⅡ峰の第２キャンプは氷河の末端にあり、そこから第３キャンプまではクレバスの多い雪原が続いていた。フカム・シンさんはインド側の隊長として陣頭に立って隊を指揮していた。日本側の隊長の私とはずっと同じような行動をとっていたが、インドと日本の合同隊

とはいってもインド人13人、日本人５人の隊では、インド隊といってもよいくらいであった。私や隊員たちは、ほとんどを彼に任せ、彼に絶大の信頼をよせていた。ところが、ツェリン・アンチョック隊員が第４キャンプへ向かう氷のガリーで誤って滑落し、死亡するという事故が発生した。隊員は意気消沈したが、フカム・シンさんは全員を集めて訓辞をし、なかなか迫力のある声で、全員の気持ちを引き締めた。さすがにＩＴＢＰの副司令官としての長年のキャリアのある人だと感嘆した。平常はにこやかであったが、いざというときは、このような凛としたところのある人であった。

その後、登頂者の一人であったプー・ドルジ隊員はカンチェンジュンガで遭難死した。別のインド人隊員もヒマラヤ登山で亡くなった。日本人隊員の峯本枢さんはクン峰で、徳島和男さんはＫ２登山を目前にして五月の穂高に消えた。この登山隊の隊員のうち４人が山から帰らぬ人となった。

1995年、10年振りにインドの山でフカム・シンさんと一緒になった。今度は、登山隊の隊長としてではなく、彼が設立した遠征登山のエイジェント会社の顧客としてであった。初めての仕事の責任者として、彼は南東ラダックのツォモリリ湖まで同行してくれ、ベース・キャンプ建設までの数えきれないほどの大小のトラブルを解決してくれた。そして、いよいよ今日から山へ向かって登り始めるという朝、フカム・シンさんも早起きして、ベース・キャンプの近くにあった経文を刻んだ石を積んで作った「マニウォール」の所でお経をあげ、安全祈願の儀式を彼自身が行ってくれた。長いお経の内容は分からなかったが、全員無事で帰ってきてくれという必死の祈りの気持ちが伝わってきたのを覚えている。彼の長い登山活動の間に多くの山の友が帰ってこなかったという悲しみを背負っており、今度は送り出す側としての心配で心が一杯だったのであろう。

私は、今年の夏に、再びフカム・シンさんのＭＥ社の世話でラダックの山に登山するが、最後となった病床で、私たちの隊のことを大変気にしていたと聞き、フカム・シンさんの最初と最後の仕事の世話になった登山隊だと思うと胸がつかえるような複雑な気持ちである。

ハリドワールの町を流れるガンジス川の上流に、フカム・シンさんの遺骨の一部が流されたという。ハリドワールとは「神の住処への入り口」という意味であるが、フカム・シンさんの霊魂はインド・ヒマラヤの彼方から昇天し、先に逝った多くの山の友人と出会っていることであろう。この思いは、あの人なつこいが気迫のある人とはもう永久に会えないという悲しみを、ほんの少しだけ忘れさせてくれる。

合掌

（1985年東部カラコルム日印合同登山隊隊長）

# フカム・シン氏を偲ぶ

尾形　好雄

インドの偉大なる登山家、ガルワールのグルーも最期はあっけなかった。彼の病気を知り、日本での治療を図ったがそれも適わず、母国に戻ったのも束の間の訃報であった。

フカム・シン氏に最初にお会いしたのは、1981年のナンダ・カートの遭難事故の時である。７名の仲間が消息を絶ったあの未曾有のガルワールの悲劇の際、ジョシマートのインド・チベット国境警察隊（ＩＴＢＰ）では逸速く捜索隊を現地に派遣してくれた。この時の司令官が彼であった。この時以来彼との付き合いは始まった。

ＨＡＪではこの時の御礼も込めて1985年のインド・ヒマラヤ会議にゲスト・スピーカーとして日本に招請した。初来日となった彼は、山ほどのお土産を携えてやってきた。ＨＡＪではヒマラヤ諸国からいろんな人を日本に招請してきたが、これほどお土産を携えて来た人もいなかった。それまでは、来る時の荷物は少なく、帰る時が山ほどの荷物になるのが殆どであった。これも彼の気配りの一端であろう。

▼1988年独立記念日、ラジブ首相（中央）と

彼との登山は、1988年のリモⅠ峰登山が最初である。当時、難攻不落を誇っていたこの山に初登頂してから、お互いの信頼感は一層深まった。

この年、ムスリーで開催されたインド・ヒマラヤ登山観光会議の席で、彼は、インド登山財団（ＩＭＦ）のゴールド・メダルを受賞された。

1990年の夏、取材班に同行してラダック、ザンスカールの山旅に出かけた折り、レーで彼にバッタリ出会った。彼は印台合同隊を率いてサセル・カンリⅠ峰の登山を終えてきたところであった。16名の大量登頂というビッグ・サクセスで高揚していたのか、唐突にカンチェンジュンガ遠征の話を持ちかけられた。ＨＡＪにとってシッキム、ゼム氷河からのカンチェンジュンガは長年来の夢であったので、このオファーは逡巡することなく受け入れられた。出発まで６ヶ月しかなく、非常に慌ただしい準備を強いられた。彼と一緒にデリーで協賛依頼のため会社往訪したり、篤志家から頂いた宝石を売り歩いたりしたのも今では懐かしい思い出である。

ラジブ・ガンジー首相が暗殺されたのもカンチ登山の時であった。悲報を耳にした彼は、絶望の深淵に突き落とされたような悲嘆にくれ、半日近くお経を唱えながらメス・テントの回りを食事も取らずに歩き回っていた。余程のショックだったのであろう。

インドとの合同隊で、マモストン・カンリ、リモⅠ峰、カンチェンジュンガ、ピラミッド・ピークといずれも垂涎の玉峰に挑む幸運に恵まれ、登頂の栄光に与かる事ができたのも、彼のような人がインドの登山界にいたからである。彼の協力なくしてこれらの登山は適わなかったと思う。ほんとうにお世話になった。

自然を畏敬し、ヒマラヤの山々を愛し、日本をこよなく愛した彼、今度生まれて来る時は、日本人に生まれてきたいと語っていた。信仰心の厚かった彼の御霊は、今頃何処を彷徨っているのであろうか……それにしても早過ぎた逝去が惜しまれる。

合掌

（1988年日印合同カラコルム登山隊隊長）

# クマオンの獅子フカム・シン

名越　實

やっぱり、顔がまるで日本人のようだったからか、その気性が多くのインド人特有のビジネスライク臭に欠けたところがあったからか、真の信仰心からくる懐の広さと情の厚さに甘えてか、なぜか私はフカム・シンさんにはズケズケと何でも言えたし、彼もまたそれを嫌がらずによく真摯に答えてくれた。1993年の東カラコルム、アク・タシ（7,016m）の合同登山である。

幸せな登山であった。

もともとは私のほうでもちかけたかなり無理な話であったのだが、たまたま広島に来て一杯飲んだというだけの成り行きで彼が総隊長を務めるはめになってしまった。運のよいやつである、いや私のことだ。こんないい男と一緒に登れて、そしてフレンドになれたのだから。

いったん許可の出たサルトロ・カンリⅡが出発直前になって変更を余儀なくされ（よくあることだが）、マモストンとサセルの間にあるアク・タシという見たことも無い？山に決まった。その時点ではついでにサセル峠を越えてあのカラコルム峠への旅行も許可されていたのだが、中国とパキスタン両国のクレームによってそれもオジャンに

なってしまった。

そんなこともあったためか彼は私たちの気持ちをよく汲んでくれ、わがままを許してくれた。ＩＭＦの決まりではたぶん合同隊は同一ルートを登ることになっているのだが、我々の登攀志向を受け入れて日印が別々のルートを登ることを彼のほうから提案してくれたのだった。なによりの思いやりであり、うれしかった。

あるときなど、私は彼の申し出を「ノージョーク！」とまで言い放って一蹴してしまったことが一度ならずあったが、彼はあの鷹揚さで何もかも包み込んで許してくれたのだった。

結果、登山は双方が初登攀（初登頂でもあるがそれはいい）を分かち合うという、この上ない幸せな終わり方をしたのであった。

もともとインドという国が私はすきである。その大好きな国にやっと気心のしれた友（といっても10歳ほど離れているのだが）ができたと思っていたのに、デリーに行けばあの男に会えると思うとそれだけで嬉しい気持ちになれたのに、毎年末メリークリスマスかハッピーニューイヤーかわからんようなカードが律義にとどいていたのに、私の大切な人だったのに……。

▼1991年秋、来日し広島の秋を楽しむ（左）

博覧強記と、寛容と、おもいやりと、けたはずれた優しさでみんなに愛された、フカム・シンさん。そう、今ごろはナンダ・デヴィかガンゴトリ、はたまたラダークのどこかでみんなの来るのを待っていることだろう。

1993年日印合同ヒマラヤ登山隊隊長　合掌

# フカム・シン氏を悼む

寺沢　玲子

4月4日未明、ファックスの音に目醒めた。フカム・シン氏令嬢アルパナさんからのフカム氏の近況報告であった。やつれた氏の様子が眼に浮かぶ。やるせない思いであった。氏の訃報を受けたのは、この数時間後であった。成田で出迎えた時の氏の笑顔や、短い入院生活中のあれこれ、そして必死に何かをこらえるかの様に空港のゲート内に消えていった氏の姿が次々と脳裏に浮かんだ。

ＨＡＪの中では新参者の割に、私は人一倍フカム氏のお世話になった。92年の日印女性合同隊は氏の働きかけ無くしては登山の成功はおろか、隊そのものの成立もままならなかった。サガルマータ登山の事後処理の合間を縫って我々の登山のために飛び回る氏を目の辺りにし、その行動力にただただ驚いた。ゴリ押しをするわけでもないのに不可能を可能にする人であった。私達の登山には、連絡官として参加していたアルパナさんを含めた全員登頂、更にその峰に“サラスワティ”と命名する誉の土産まで付いた。

翌93年秋、岳兄佐々木裕一氏率る帯広ビスタリクラブ隊のニルカンタでの大惨事の事後処理のために訪印した際の氏の職務を超えたサポートは、言葉では云いつくせない。「泣いていても笑っていても落ち込んでいても、時間は同じ様に流れる。君は今何のためにここにいる？泣くヒマがあるなら仕事をしろ、手を休めるな！」厳しくも思いやりのこもった氏の言葉に励まされ続けた4日間だった。氏のかけ声で休日を返上して諸機関が動いた。そして97年秋、無理を承知で氏にニルカンタ北面眺望と慰霊碑再設置の旅の相談をした。インナー・ラインが後退したとは云え、アラクナンダの谷の奥深く入るためにはそれ相当の手続が必要となる。

当の私が半ばあきらめかけている時でさえ、氏は努力してくれていた。結果として私達はニルカンタ北壁に対面し、聖なる湖サトパント湖で6名の冥福を祈る事が出来た。これに先立ち、リシガンガ沿いのチャラン・バドゥカの丘には6名のための慰霊の碑を再設置する事が出来た。江尻建二氏が持参した石の地蔵が不思議とマッチしていた。これがフカム氏の最後のトレッキングとなったが、この旅には氏とも親しい故佐々木氏やニルカンタ峰唯一の生存者松山昭氏の旧友でＮＨＫニューデリー事務所の太田夫妻も同行、夫妻とフカム氏は慰霊碑設置後私達と別れて花の谷に向った。今にして思えば、この旅では何時になく疲れを見せていた氏であった。既に体調に異変をきたしていたのかも知れない。生涯忘れる事の出来ない、悲しくも楽しいフカム氏との旅であった。

幼くして父を失い、想像を絶する苦労をしてきたフカム氏は、家族や人の連がりをとても大切にしていた。何があっても他人を憎んではいけない、他人のアラ探しをするよりその人の長所を見なさい、アルパナさん達に最期までそう語りかけたという。今、己を含めてこの様に考え、実践出来る人はどれだけいるのだろう。

偉大な岳人を失った想いもさることながら、肉親を失ったに等しい喪失感を覚えている。泣いていても笑っていても時は確かに同じ様に流れる。頭では理解していても、今しばらくはフカム・シン氏の思い出に浸り、涙していたい。　　合掌

4月17日　ニューデリーにて

## フカム・シン氏略歴

★1938年2月26日　ウッタル・プラデシュ州のクマオンはムンシャリで生れる。

★妻　Pushpa

長女　Arpana　長男　Yogesh　次男　Rajesh

★1957年アルモラで大学入学

★1963年インド陸軍入隊

★1967年インド国防省中央警察に入り、ＩＴＢＰへ配属となる。

★インド、Ｊ＆Ｋ州のグルマルグ＆ソナマルグの陸軍山岳兵学校で登山とスキーを学ぶ。またオーストリアで登山とレスキュー技術を修得。

★1988年インド登山財団ゴールドメダル受章。

★ＩＴＢＰ副総監、ＩＭＦ幹事、インド冬期競技財団理事などを歴任し、退職後は、ＭＥ社を設立し、インド・ヒマラヤを中心に登山・トレッキングのアレンジを行っていた。

★ヒマラヤ登山歴

1970　トリスル（7,120m）隊長、登頂者

〃　ナンパ（6,755m）連絡官

1972　デヴァチェンＳ（6,000m）隊長、登頂者

〃　パンチ・チュリＩ（6,355m）隊長(初登頂)

1973　バラクン（6,471m）隊長（初登頂）

1974　シヴリン（6,453m）隊長（初登頂）

1976　トリスル（7,120m）副隊長、スキー滑降

1985　サセル・カンリⅡ（7,518m）ＨＡＪ合同隊隊長（初登頂）

1988　リモＩ（7,385m）ＨＡＪ合同隊隊長（初登頂）

1989　ヌン（7,135m）ＵＩＡＡ隊、隊長

1990　冬期デマベンド（5,671m）隊長

〃　サセル・カンリＩ（7,612m）台湾合同隊、隊長

1991　カンチェンジュンガ（8,586m）ＨＡＪ合同隊隊長

1992　サガルマータ（8,848m）隊長

1993　アク・タシ（7,016m）広島山岳会合同隊隊長（初登頂）

※その他

1992　アルベールビル（フランス）冬期オリンピック、インド選手団団長

▲3月15日ＨＡＪの会員に見送られ帰国

# ヤル・ツァンポ河大峡谷の踏査

## ―― 北京週報No.13（1998.3.31）――

### はじめに

今年の春、中国の学者たちが初めてチームを組織し、世界一の大峡谷であるヤル・ツァンポ河大峡谷の探検および現地調査を行う予定である。聞く所によると今回の調査は予備調査で、日数は約40日が予定されており、本調査は今年の秋に二ヵ月余りを費やして行われるという。すべての調査ルートも、近日中に決定される。

ヤル・ツァンポ河はヒマラヤ山脈の中程の北側に源を発し、中国国内の流域全長は2,100km、平均海抜は3,000mで、世界で最も海抜の高い所を流れる大河である。大峡谷はチベットの南東のミリン県のパイ区から始まり、ヒマラヤ山脈を縦断して、東経95度付近でナムチャ・バルワ峰（標高7,782m、世界第15位）のふもとを巡って、珍しい馬蹄形の大旋回を見せている。ヤル・ツァンポ河はこの旋回に沿って流れ、世界の奇観を形作っている。

1994年4月18日に中国の学者は、ヤル・ツァンポ河大峡谷が地球上で最大の峡谷であるという重要な発見をすでに世界に向けて公表していた。ヤル・ツァンポ河大峡谷の長さは496.3kmで、これまで世界最長と考えられていたアメリカのコロラド峡谷（長さ440km）を上回っており、深さは最も深い所で5,382m、平均5,000m前後で、これもまた最も深いと考えられていたペルーのコルカ峡谷（深さ3,200m）をはるかにしのいでいる。この地理的発見は、海外の学者や探検家たちの大きな関心を引いた。

ヤル・ツァンポ河大峡谷の調査探検に関する話は昨年にはすでに打ち出されていたが、経費などの事情もあって実現には至らなかった。今回の踏査のため実際に集められた資金は、今でも予備調査に用いるだけで精一杯である。しかし学者たちは、少しもひるんだりはしない。計り知れない神秘のベールに包まれた前人未到の地を前に、大峡谷を六回も訪れたことのある楊逸疇教授は、「こと今に至って、われわれはこれ以上待つことはできない」と感慨深げに語った。

### 調査目標

学者たちは調査の目標をおおむね次のように定めている。

――徒歩による大峡谷の走破と現代の科学的手段と情報システムの利用によって、世界一の峡谷の走破の困難と危険に満ちた過程や数々の神秘的自然景観を世に広め、大峡谷内に一連の世界レベルの自然奇観があることを論証し、この地域に生活する人々の知られることの少ない民族文化を紹介する。

――大峡谷地域の動物、植物、水文、地形、氷河、地質などの一連のデータを幅広く収集し、同地域に自然資源が特別に豊富であることを論証して、今後の大峡谷の開発のための基礎となるよりどころを提供する。

――大峡谷の水路としての開発利用の可能性を研究し、大峡谷の下流地域の経済建設に奉仕する。

――大峡谷開発の、観光や学術調査を含む自然保護および持続的利用の開発建設計画を制定し、大峡谷自然保護区および国家生態公園の建設案を提出する。

――今回の学術探検調査を記録したドキュメンタリーフィルムを撮影し、一連の学術調査の成果を出版、発表する。

「人類の大自然に対する知識は止まることを知らないようですが、自然を『征服』するなどという考え方はもってのほかです。大峡谷が世界一であるというわれわれの論証もまた、現段階における中国の科学技術の水準を示すことができるだけです」と楊教授は語る。また科学技術水準が学術調査に及ぼす影響について楊教授は、90年代初期までは室内での論証であって、そのための材料としては同地域の五万分の一の航空測量地図や衛星

画像および航空写真があっただけで、そのようなものを用いて分析や測量、計算などを行ったとしても、その精度は言うまでもなく高いはずがなかったが、再度大峡谷へ赴く今回は全地球測位システム（ＧＰＳ）やレーザーレンジファインダーなどの新しい手段を用いての大峡谷の測量が十分可能となっており、その結果は必ずや現在発表されている定量的データと照らし合わせても精密で正確なものとなるはずであると指摘した。

しかし楊教授は、次のように強調する。「ヤル・ツァンポ河大峡谷は深さや長さの点で世界のその他の有名な峡谷をはるかにしのいでいますから、例えどのような先進技術を採用したとしても、ヤル・ツァンポ河大峡谷が世界一であるという事実は変わらないと信じます。」

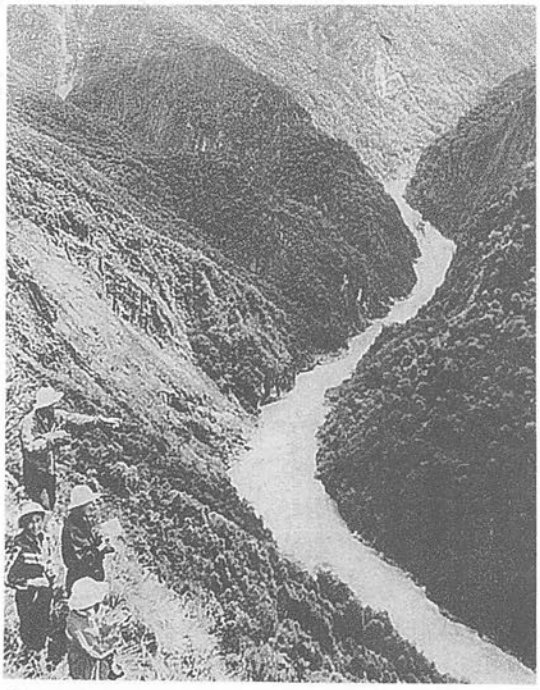
## これまでに知られている大峡谷の様子

1994年以来、楊教授をトップとする中国の学者たちは何回も大峡谷に赴き、その状況についてはある程度知っていた。その情熱あふれる筆致で書き記された見聞録は、読む人の心を引き付けるものがある。

学者たちの説明では、大峡谷には中国ひいては世界でも珍しい氷河のタイプが見られるという。この峡谷の高山地帯に来れば、いつでもどこでも巨大な雪崩を目にすることができると言ってもいいくらいである。巨大な氷河は曲折した谷の起伏に沿って変化し、そのために巨大な氷の滝もできている。そして氷河の急速な活動によってその下流には多くの亀裂が生じ、氷河の厚い表層には植生も見られる。またある氷河は谷の傾斜に直接かかっており、その下には氷や雪崩が扇状にたい積してうずたかくなっている。

専門家はまた、大峡谷では氷雪に覆われている部分のふもとの方に、緑の世界も広がっていると告げる。ヤル・ツァンポ河大峡谷はインド洋の方から来る南からの湿った空気が青海チベット高原に流れ込む主なルートであるため、それによってもたらされる十分な水分と熱が緑地帯を形づくる。この地では海抜4,000ｍ以下は至る所でうっそうとした原生林が生い茂っており、半常緑モンスーン雨樹林からモミの樹林に至るまで世界で最も樹

▼1994年４月、中国の学者によってヤル・ツァンポ河大峡谷の実地調査が行われた



木の種類のそろった垂直に伸びる自然ベルト地帯となっている。この何ら現代文明の汚染を受けていない緑の宝庫には、希少価値のある「生きた化石」の動植物種が大量に生存している。

それと同時に、大峡谷は文化の宝庫でもあると専門家は見ている。現在その中心地域はなお無人地帯であり、「死の谷」であると見なされている。ただ大峡谷下流のモト県にメンパ族とロッパ族が住んでいるが、氷雪に阻まれているため、この県は今でも国内で唯一外部と道路でつながっていない県となっている。この部分の渓谷の上における主な交通手段は、簡易空中ケーブル、フジのつたで編まれた橋やつり橋である。またここでは人々は今でも焼き畑農法による農耕生活や狩猟生活を営んでおり、さらには縄を結んでの物事の記録や木を刻んでの計算、物々交換による取引などの生活と文化様式が今なお残されている。こういった文化が存在することによって、大峡谷は他と比べようもない魅力をより一層増している。

# 月刊「ヒマラヤ」表紙写真「山」一覧表 (98号～279号)

ＨＡＪ創立30周年記念行事の一環として、機関誌「ヒマラヤ」の総目次の刊行を予定しているが、今回は、ヒマラヤの表紙を飾った「山」をまとめた。尚、97号までは絵画であった。

| 号数 | 山　　名 | 標高 | 国 | 撮影者 | 撮影場所など | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 98 | シヴリン | 6,543 | I | 稲田　定重 | | |
| 99 | ジュトマル・サール | 7,330 | P | 村田　芳春 | スパンティーク頂上 | 南　面 |
| 100 | ガネッシュ・ヒマールM | 7,429 | N | 依田　孝喜 | トロゴンパ氷河4,000m | 北　面 |
| 101 | ナンパ | 6,755 | N | 高橋　正幸 | サリモール・コーラ | |
| 102 | Ｋ２＆ブロード・ピークM | | P | 荘司　昭夫 | チョゴリザ北稜6,350m | |
| 104 | マチャプチャレ＆ヒウンチュリ | | N | 水野　治朗 | | |
| 105 | バルンツェ | 7,220 | N | 緒方　奎介 | ホング・コーラ、パンチポカリ | |
| 106 | カングルー | 6,981 | N | 対島　厳 | | |
| 107 | ゴンボ・ランジュン岩峰 | | I | 森田　千里 | | |
| 108 | ユクシン・ガルダン・サール | 7,530 | P | 杉本　忠男 | アッパー・ヤズギル氷河 | |
| 109 | チョゴリザ | 7,668 | P | 田村　俊介 | カペリ氷河 | 南　壁 |
| 111 | ヤルン・カン | 8,505 | N | 菊地　薫 | グレート・シェルフ7,300m | 南東壁 |
| 112 | ミニヤ・コンカ | 7,556 | C | 京極　紘一 | ハイローコー氷河 | 東　面 |
| 116 | サイパル | 7,031 | N | 細貝　栄 | クワリ・コーラ | 東　壁 |
| 118 | ナムナニ(グルラ・マンダータ) | 7,694 | C | 高橋　正幸 | ネパール、ウライ峠 | 南　面 |
| 121 | カンチェンジュンガM | 8,586 | N | 菊地　薫 | グレート・シェルフ | 西　面 |
| 122 | ランタン・リ | 7,205 | N | 那須　宗一 | ランタン氷河のＢＣ | |
| 123 | マチャプチャレ | 6,993 | N | 吉越　文隆 | アンナプルナ内院南氷河 | |
| 124 | ナンダ・コート | 6,861 | I | 尾形　好雄 | ナンダ・カート6,000m | |
| 125 | ククサール | 6,935 | P | 内田　勲 | ティルマンのコル5,791m | |
| 126 | シスパーレ | 7,611 | P | 池田　清利 | ティルマンのコル5,791m | 西　面 |
| 127 | ヒマルチュリ | 7,893 | N | 菊地　薫 | マルシャンディ | |
| 128 | バトゥラ山群6,258m峰 | 6,258 | P | 内田　勲 | カランバール氷河 | |
| 129 | ニルギリN | 7,061 | N | 菊地　薫 | カクベニ | |
| 130 | アンナプルナⅡ＆Ⅳ | | N | 菊地　薫 | ブリクティ・サイル頂上 | |
| 131 | ハチンダール・キッシュ | 7,161 | P | 亀井　建樹 | バルタール氷河 | 西　面 |
| 132 | バウダ・ピーク | 6,672 | N | 宮崎　久夫 | ヒマルチュリ南西稜 | |
| 134 | ユクシン・ガルダン・サール | 7,530 | P | 粕谷　俊矩 | | |
| 136 | ディスタギル・サール | 7,885 | P | 粕谷　俊矩 | マラングッティ氷河 | |
| 138 | プリアン・サール | 6,293 | P | 山森　欣一 | ハチンダール・キッシュ5,030m | |
| 156 | ナムナニ | 7,694 | C | 山森　欣一 | ナムナニ氷河5,900m | 北東面 |
| 157 | マモストン・カンリ | 7,526 | I | 尾形　好雄 | マモストン氷河 | |
| 168 | Ｋ２ | 8,611 | P | 飛田　和夫 | | |
| 169 | ムーシュ・ムスターグ | 6,638 | C | 登　山　隊 | 八花氷山 | 東　面 |
| 170 | サセル・カンリⅡ | 7,518 | I | 沖　　允人 | サカン氷河 | |
| 171 | ガンカル・プンスム | 7,590 | B | 尾形　好雄 | | 西　面 |

| 号数 | 山　　名 | 標高 | 国 | 撮影者 | 撮影場所など | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 173 | トリヴォール | 7,728 | P | 杉本　忠男 | モムヒル氷河 | |
| 174 | クンヤン・チッシュ | 7,852 | P | 杉本　忠男 | マラングッテイ・サール頂上下 | |
| 175 | ルプガル・サールE | 7,200 | P | 杉本　忠男 | モムヒル氷河 | |
| 176 | デュット・サール | 6,858 | P | 杉本　忠男 | マラングッティ・サール | |
| 177 | モムヒル・サール | 7,342 | P | 杉本　忠男 | モムヒル氷河 | |
| 178 | ディスタギル・サール | 7,885 | P | 杉本　忠男 | マラングッティ・サール南稜C 2 | |
| 179 | トランゴ、ネームレス・タワー | 6,239 | P | 吉田　憲司 | デュング氷河 | |
| 180 | シュエ・バォディン | 5,588 | C | 登　山　隊 | BC | 南　面 |
| 181 | ラランティ | 6,032 | I | 登　山　隊 | ドゥバ氷河 | |
| 182 | チョー・アウイ | 7,354 | C | 登　山　隊 | ジャブ・ラ氷河BC | 北西面 |
| 183 | ナムチャ・バルワ | 7,782 | C | 尾形　好雄 | | 西　面 |
| 184 | センダン・プー | 6,812 | C | 尾形　好雄 | ギャラ・ペリC 2 | |
| 185 | チョム・カンリ | 7,048 | C | 山森　欣一 | トンコ・ラ下4,200m | 南西面 |
| 186 | 四川省無名峰 | 5,800 | C | 山森　欣一 | 新都橋上の高原 | |
| 187 | サンルン | 7,095 | C | 尾形　好雄 | ギャラ・ペリC 3 | 北　面 |
| 188 | ナイプン | 7,043 | C | 山森　欣一 | キィカル | 西　面 |
| 189 | ナムチャ・バルワ無名峰 | | | 尾形　好雄 | ターリン | |
| 190 | メンルンツェ | 7,181 | N | 斎藤　安平 | ガウリシャンカール | |
| 191 | チョー・オユー | 8,201 | C | チベット隊 | ジャブ・ラ氷河 | 北西面 |
| 192 | ゲニ無名峰 | | C | 飛田　和夫 | | |
| 193 | ゲニ無名峰 | | C | 飛田　和夫 | 4,100m | |
| 194 | ラプチェ・カンII | 7,072 | C | 登　山　隊 | ラプチェ・カン西稜 | 東　面 |
| 195 | ガウリシャンカール | 7,134 | C | 森山　安次 | ラプチェ・カン西稜 | 北　壁 |
| 196 | シシャパンマ | 8,027 | C | 登　山　隊 | ラプチェ・カン西稜 | 東　面 |
| 197 | ラプチェ・カンE | 7,100 | C | 斎藤　安平 | | 北　面 |
| 198 | マチャプチャレ | 6,993 | N | 群馬岳連隊 | アンナプルナI南壁C 2 | |
| 199 | 四川省無名峰 | | C | 山森　欣一 | 新都橋高原 | 南南西 |
| 200 | ヤンモーロン | 6,060 | C | 山森　欣一 | 巴塘手前(ダンチェツェラとも云う) | |
| 201 | シンチン | 6,860 | C | 峯岸　一 | | |
| 202 | ゲニ | 6,204 | C | 天城　敞彦 | 南稜末端4,350m | |
| 203 | ゴリチェン | 6,706 | I | インド隊 | BC | |
| 204 | リモI&III | 7,380 | I | 尾形　好雄 | ノース・テロン氷河 | 南西面 |
| 205 | ヌブラ谷無名峰 | | I | 尾形　好雄 | テロン谷出合 | |
| 206 | リモIII | 7,233 | I | 尾形　好雄 | リモI峰C 3 7,000m | |
| 207 | K12 | 7,469 | I | 尾形　好雄 | リモI峰アイベックスのコル | |
| 208 | チョー・アウイ | 7,354 | C | 清水　修 | チョー・オユー西北西稜7,200m | 北　面 |
| 209 | シャラリ | 6,034 | C | 孟　天立 | | 東　面 |
| 210 | メイリー・シュエシャン | 6,740 | C | 王　建華 | | |
| 211 | チョング・クムダン | 7,071 | I | 尾形　好雄 | | |
| 212 | P.7,016m峰 | 7,016 | I | 尾形　好雄 | | |
| 213 | チョモランマ | 8,848 | C | | | 北西壁 |
| 214 | タルン・ピーク&カブルー | | N | 登　山　隊 | カンチェンジュンガABC7,300m | |

| 号数 | 山　　名 | 標高 | 国 | 撮影者 | 撮影場所など | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 215 | K 2 | 8,611 | P | 飛田　和夫 | | |
| 216 | シャラリ | 6,032 | C | 山森　欣一 | 南東ＢＣ4,500m | 北西面 |
| 217 | ヤンメイヨン | 5,958 | C | 山森　欣一 | 4,188m | 北　面 |
| 218 | シャノドジ | 5,958 | C | 山森　欣一 | コンカ・チョンブー4,000m | 北西面 |
| 219 | チョモランマ＆チャンツェ | 8,848 | C | 尾形　好雄 | | 北西壁 |
| 220 | クーンブツェ | 6,640 | C | 尾形　好雄 | 中央ロンブク氷河 | |
| 221 | ハン・テングリ | 7,010 | S | イースト | ※写真は裏焼きである | 北　面 |
| 222 | ポベーダ | 7,439 | S | | | |
| 223 | カルン・クー | 6,977 | P | 弘前登山隊 | ディラン北稜 | |
| 224 | クンヤン・チッシュ | 7,852 | P | 弘前登山隊 | ディラン北稜 | |
| 225 | アイカチェ・チョック | 6,500 | P | 山森　欣一 | ハチンダール・キッシュ6,000m | 北　面 |
| 226 | タイメ・キッシュ | 6,402 | P | 山森　欣一 | ハチンダール・キッシュ5,740m | |
| 227 | チョモラーリ | 7,134 | C | チベット隊 | 中国側高原 | 西　面 |
| 228 | ティリツォ・ヒマール | 7,134 | N | 尾形　好雄 | | |
| 229 | チョゴリ | 8,611 | C | 今村　裕隆 | ＢＣ | 北　面 |
| 230 | カンザ・リ | 6,305 | C | 東野　　良 | 高原 | 西　面 |
| 231 | ヌン | 7,135 | I | 尾形　好雄 | ユルドゥ | |
| 232 | ツァンラⅠ＆Ⅱ | 6,495 | C | 山森　欣一 | ティンリ4,500m | 東　面 |
| 233 | Ｚ３ | 6,270 | I | 尾形　好雄 | ペンシ・ラ4,380m付近 | |
| 234 | マラン・シャン | 5,790 | C | 中国画報 | | |
| 235 | チェルー・シャン | 6,168 | C | | 空撮 | |
| 236 | シュエ・バオディン | 5,588 | C | 四川登協 | | 南　面 |
| 237 | カンチェンジュンガ | 8,586 | I | 尾形　好雄 | ゼム氷河ＢＣ4,935m | 東　面 |
| 238 | チョンブー | 6,362 | I | 尾形　好雄 | ルンナク・ラ | |
| 240 | トゥインズ | 7,350 | I | 尾形　好雄 | | |
| 242 | ミニヤ・コンカ | 7,556 | C | 山森　欣一 | ハイズーコ氷河ＢＣ3,400m | 東　面 |
| 243 | ポベーダ | 7,439 | S | 近藤　和美 | ハン・テングリ6,000m | 北　面 |
| 244 | タイシャン（ミニヤ・コンカ） | 6,468 | C | 山森　欣一 | ハイローコー氷河ＢＣ3,400m | 東　面 |
| 245 | ダシュエシャン（　〃　） | 6,410 | C | 山森　欣一 | ハイローコー氷河ＢＣ3,400m | 東　面 |
| 246 | ソンヤッツェン（　〃　） | 6,886 | C | 中川　　裕 | ミニヤ・コンカ北東稜6,300m | 南西面 |
| 247 | サガルマータ | 8,848 | N | 尾形　好雄 | カラパタール頂上 | |
| 248 | ガンダルヴァ・チュリ | 6,248 | N | | ※旧名ガーベルホルン(アンナプルナ内院) | |
| 249 | アマダブラム | 6,812 | N | 尾形　好雄 | ペリチェ裏山 | |
| 250 | チャンツェ | 7,553 | C | 尾形　好雄 | クーンブ氷河 | |
| 251 | ギャチュン・カン | 7,952 | N | 尾形　好雄 | | |
| 252 | ローツェ | 8,516 | N | 尾形　好雄 | サガルマータ南西壁 | |
| 253 | プモ・リ | 7,161 | N | 尾形　好雄 | 空撮 | 南東面 |
| 254 | チョー・オユー | 8,201 | N | 尾形　好雄 | 空撮 | 南東面 |
| 255 | チョー・アウイ | 7,354 | N | 尾形　好雄 | 空撮 | 南　面 |
| 256 | マカルー | 8,463 | N | 尾形　好雄 | ペリチェ裏山 | 西　面 |
| 257 | ムスターグ・アタ | 7,546 | C | 山森　欣一 | スバシ3,800m | 西　面 |
| 258 | クラウン | 7,295 | C | 山森　欣一 | Ｃ３上5,100m | 東　壁 |

| 号数 | 山　　名 | 標高 | 国 | 撮影者 | 撮影場所など | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 259 | インスガイティ氷河無名峰 | 5,800 | C | 山森　欣一 | クラウンC２ 4,400m | 北　面 |
| 260 | スカムリ～バインターブラック | | C | 中川　　裕 | クラウンC５ 6,500m | 北　面 |
| 261 | ラトナ・チュリ | 7,035 | N | 丹羽由紀夫 | ヒムルン・ヒマール | 南　面 |
| 262 | ギャジカン | 7,038 | N | 丹羽由紀夫 | | 北　面 |
| 263 | シニオルチュー | 6,887 | I | 尾形　好雄 | ネパール・ピーク氷河 | |
| 264 | ユイチュ | 6,179 | C | 山森　欣一 | ＢＣ下高原4,900m | 南　面 |
| 265 | ヌン | 7,135 | I | 中川　　裕 | スノー・プラトー5,200m | 西　面 |
| 266 | ムスターグ・アタ | 7,546 | C | 酒井　國光 | スバシ3,800m | 西　面 |
| 267 | メンジボ（梅里雪山周辺） | 6,006 | C | 中村　　保 | 徳欽展望台3,500m | 東　面 |
| 268 | メイリー・シュエシャン | 6,740 | C | 中村　　保 | 徳欽展望台3,500m | 東　面 |
| 269 | チョー・オユー | 8,201 | C | 尾形　好雄 | ジャブ・ラ氷河 | 西　面 |
| 270 | ナンビ・ゴ・スン無名峰 | 6,900 | N | 尾形　好雄 | ジャブ・ラ氷河 | 北　面 |
| 271 | エヴェレスト＆ローツェ | | | 尾形　好雄 | チョー・オユー頂上 | |
| 272 | ラプチェ・カン山群 | 7,367 | C | 尾形　好雄 | チョー・オユー頂上 | 南　面 |
| 273 | ガウリシャンカール | 7,134 | C | 尾形　好雄 | チョー・オユー頂上(手前にメンルンツェ主峰) | 北東面 |
| 274 | タムセルク | 6,623 | N | 尾形　好雄 | シャンボチェ | |
| 275 | ツォラツェ（チョラツェ） | 6,440 | N | 尾形　好雄 | ツォラ・ツォ | |
| 276 | ヌプツェ | 7,855 | N | 尾形　好雄 | | |
| 277 | ミニヤ・コンカ | 7,556 | C | 中村　　保 | 子梅山4,700m | 西　面 |
| 278 | トゥインズ（ギミゲラ） | 7,350 | I | 尾形　好雄 | カンチェンジュンガ北東支稜 | 南　面 |
| 279 | ラトナ・チュリ | 7,035 | N | 田辺　　治 | ギャジ・カン頂上(遠くルンボ・カンリ) | 南　面 |


# 山の情報誌「岳人」

GAKUJIN
岳人

毎月15日発売（日・祝日の場合は前日）定価700円

■本誌の年間購読ご案内
本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。
直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。
郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。
お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

| 98年 | 特　集 |
|---|---|
| ★ 1月号 | ぼくの好きな雪の山小屋で |
| 2月号 | 粉雪わけて爽快山スキー |
| ★ 3月号 | 駅から登るとっておきの山 |
| 4月号 | 新緑と残雪を求めて5月の山 |
| ★ 5月号 | 山の本、名作をめぐる春山紀行 |
| 6月号 | 高層湿原、もう一つの尾瀬へ |
| ★ 7月号 | 夏は北海道の花と渓流へ |
| 8月号 | 真夏に涼を求めて、高原へ |
| 9月号 | 初秋の単独行の山歩き |
| ★10月号 | 上信越の紅葉をさぐる |
| 11月号 | 名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ |
| 12月号 | 冬山入門、心構えと特選コース |

（★は特大号となります）

東京新聞出版局（中日新聞東京本社）〒108-8010　東京都港区港南2-3-13　TEL 03-3740-2674
全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

# 地域ニュース

## 《中国》

### チベット登山隊、カンチへ

チベット自治区の「チベット登山隊」が、隊としての8千メートル峰14座登頂計画を発表（1993年）してから今年で6年目に入った。

既に表のとおり8座を掌中に収めているが、マカルーでの敗退など、行けば必ず登れると云う訳にはいかないようである。今年はカンチェンジュンガに挑戦するが、大物のチョゴリ（K2）を自国から登るのが注目される。

### チベット登山隊8千米峰14座登頂

| | 山　名 | 登頂日 | 登頂者名 |
|---|---|---|---|
| 1. | チョモランマ<br>北稜～北東稜 | 1990, 5, 7 | 旺加　加布 |
| | | 5. 9 | 仁那　達穹<br>洛則 |
| 2. | アンナプルナⅠ<br>北面 | 1993, 4,26<br>18時45分 | 次仁多吉　仁那<br>辺巴扎西<br>阿克布 |
| 3. | ダウラギリⅠ<br>北東稜 | 1993, 5,30<br>17時30分 | 次仁多吉　達穹<br>辺巴扎西<br>阿克布 |
| | | 5,31<br>10時45分 | 旺加　加布<br>大斉米　仁那<br>洛則 |
| 4. | シシャパンマ<br>北東稜 | 1994, 5, 7<br>12時55分 | 旺加　次仁多吉<br>加布　大斉米<br>仁那　辺巴扎西<br>達穹　阿克布<br>洛則 |
| 5. | チョー・オユー<br>北西面 | 1994, 9,30<br>11時20分 | 旺加　次仁多吉<br>加布　大斉米<br>仁那　辺巴扎西<br>達穹　阿克布<br>洛則 |
| 6. | ガッシャーブルムⅡ | 1995, 7,10<br>13時40分 | 次仁多吉　洛則<br>辺巴扎西<br>阿克布 |
| | | 7,11<br>16時25分 | 旺加　加布<br>仁那　達穹 |
| 7. | マナスル<br>北東面 | 1996, 5, 3<br>14時55分 | 次仁多吉　仁那<br>辺巴扎西<br>阿克布 |
| | | 5, 4<br>11時40分 | 旺加　達穹<br>洛則　加布 |
| 8. | ナンガ・パルバット<br>西面 | 1997, 6,15<br>14時15分 | 次仁多吉　仁那<br>辺巴扎西　加布<br>洛則　阿克布 |

## 《ネパール》

### 山岳博物館援助委員会発足す

ポカラに建設中の国際山岳博物館を支援するためネパールに援助委員会が発足した。委員長には元観光大臣のハルカ・グルン博士が就任した。

また同委員会では、現国王の弟であるクマール・カドカ・ビクラム・シャー殿下にも後援を依頼したことを伝えている。

日本での支援募金については、前号に掲載したように日山協が窓口となりＨＡＪをはじめ登山関係団体が協議会を発足させて活動を開始しているが、4月15日付朝日新聞（運動面）でもこの活動が大きく報ぜられた。

### 西ネパールへ2隊が挑戦

最近ではすっかり影の薄くなった西ネパールの山に今秋日本から2隊が挑戦することになった。

一つは、大阪山の会隊（隊長：吉永定雄ら7名）で、パトラシ・ヒマールの最高峰（6,450m）とチャンラ・ヒマールの最高峰（6,563m）を狙うもので、カンティ・ヒマールやゴラク・ヒマールの偵察も行うと云う壮大な遠征である。70歳代1名、60歳代2名を含む隊の活躍が期待される。

もう一つは、バーバリアン・クラブ隊（隊長：野沢井歩ら3名）で、サイパル（7,031m）の北面を探る。南、西、北東から登頂を許しているサイパルだが、残されたルートは果してあるのか。結果が待たれる。

# トッピクス

## 海外登山情報センター設立の動き

3月4日、日本山岳協会（田中副会長、八木原国際部長）、日本勤労山岳連盟（斉藤副理事長、香取海外委員長、近藤海外委員）、日本山岳会（大森副会長、鰺坂理事）、日本ヒマラヤ協会（山森専務理事）の山岳4団体の代表者と関連する山と渓谷（池田常道）、岳人（永田秀樹）、アジア山岳連盟（神崎忠男）、国際山岳連盟（貫田宗男）が日本山岳会の呼びかけに応じる形でトップ協議を行った。協議の目的は「ヒマラヤ登山の情報の一本化を目指すための組織を作ること」であった。

この日の協議では以下のことが合意された。

1．ヒマラヤなど高所登山情報が一元的に集積しなくなっている現状を改善せねばならない。
2．“登山者やトレッカーの安全のための情報を”という観点からこの情報の集中と提供に各登山団体は協力しあい、これらの情報を電子的に収集整理し、そしてそれを広く登山者やトレッカーに開示する機構を考える時期にきている。
3．このため、各種行政諸機関団体などとの折衝を行う日本山岳協会を中心とした、各全国的組織の代表からなる“海外情報センター設立委員会”の設立を展望したい。
4．上記に必要な技術的実践的問題を解決するための準備委員会を、日本山岳協会主導の下、以下の委員により発足させる。

委員長（八木原圀明）　委員（近藤和美、香取純、山森欣一、尾形好雄、鰺坂青々、神崎忠男、貫田宗男、池田常道、永田秀樹、松田雄一、増山茂、三上博民、大蔵喜福）

次いで早速3月24日に準備委員会が、八木原委員長以下、香取、山森、鰺坂、貫田、松田、増山、大蔵各委員出席の下、全般的な展望について協議を行った。次回は4月20日に開催される予定。

（注）山と渓谷5月号に「3団体が合意」との見出し記事は正確な情報ではなく、内容についてもデータベースに重点が置かれ過ぎている。

（山森）

## イエティはいるか？

4月12日付朝日新聞に『「雪男」よく聞けよ山男が会いに行く』と題する記事が載った。

尾崎啓一氏が友人と2人で「雪男探検10年計画」を始め、ヒマラヤの主な山域を捜索するとのことである。尾崎氏は「地球に数少なくなりつつあるロマンを求めて旅を続けたい」と夢を膨らませていると云う。

尾崎氏は1971、74年に仲間と共に雪男探検隊を組織した経験を持ち著書も出版している。

一方、94年にダウラギリ山群のコーナボン・コーラ地域で「イエティ」捜索を行った高橋好輝氏も再び捜索隊を組織すべく準備を進めていると云う。（この模様はフジテレビ系列で放映された。）

高橋氏は「イエティと言われる獣が例えどのようなものであれ、ヒマラヤに生息する動物の一種との考えに立ち、具体的には、コーナボン・コーラ南東稜5,000m前後でしばしば発見される蹠行性の足跡に焦点をあて、その正体を解明する」としている。

高橋氏は「未知のものに対し興味を持つことは、人間の本能であるとともに、ひとつの文化ともいえる」と言い、今夏に予定している再度の捜索実現に意欲を燃している。

果して「ヒマラヤ」の一大ロマンである未確認動物「イエティ・雪男」は存在するのか。解明が待たれるところである。

# BOOKS

## キシュトワール・ヒマラヤ遠征報告書

北大山岳部が、1997年夏にインド、キュシュトワール山群のドーダ（6,550m）に派遣した登山隊の報告書。学生とOB各2人から成る隊は8月13日全員登頂を果した。報告書は写真を主体として編集されている。

A4判　96頁　平成10年3月14日刊

〒060-0817　札幌市北区北17条西12丁目
北大新サークル会館内

### シルクロードの白い峰

中年で構成されたスキーDEサミット隊が、97年夏ムスターグ・アタ（7,546m）に遠征した記録。「従来の型を破った報告書を編むことにした」と編集後記にあるようにカラー写真による報告と、それぞれの感想記で成り立っている。概念図で肝心のムスターグ・アタの位置が違ったり、写真説明で山名の取り違えなどもみられる。

B５判　32頁　1998年３月20日刊

〒102-0075　千代田区三番町20-２-503

### 8,201mの頂きに８人全員立った

1996年春に札幌中央勤労者山岳会が、チョー・オユーに登山した報告書。全員登頂に成功したものの許可取得からシェルパのアレンジまでを、カトマンズのエージェントに依頼。エージェントとのトラブルが報告されている。出発までの１年間に40回以上の隊員会議を開催。各係の報告も微に入り細に入る。膨大な量の座談や感想記。そこに詰め込まれているのは、登頂に向けての苦労話しである。これほどの量の文章の中に、誰一人として「環境」についてふれていないのはどうしたことだろうか。何かが違うような気がした。（山森）

A４判　94頁　カラー８頁

〒060-0807　札幌市北区北７条西８丁目
札幌中央勤労者山岳会

### ヒマラヤ　満点星

精力的にヒマラヤの山々の撮影を行っている写真家「藤田弘基」氏が、視点を変えてヒマラヤの山々に輝く「星」にスポットを当てて出版した写真集。氏は「星」の素晴らしさを強調したかったのかも知れないが、「星」によって、その下に寝静まる「山々」が際立って美しく感ぜられるのは、岳人の性であろうか。　（山森）

B５変形判　82頁　1998年３月16日刊

平凡社　2,200円

### Rock＆Snow

「日本で初めての『岩と雪の世界で遊ぶ』スペシャルマガジン」と詠って、山と渓谷社から発刊された。今年は２冊でゆくゆくは定期刊行となる。192ページ中、ヒマラヤに関するものは、ネパールのメラ・ピーク（6,476m）をスキーやスノーボードで滑った記録がカラーで４ページ。ヒマラヤ・クロニクル1997年として主に日本隊の活動を紹介した４ページ。これ知ってる？と題して今年の登山隊の動向を紹介した２ページ。合計10ページである。山と渓谷と同様の判。1998年春夏号 1998.５.５刊行。980円

## ヒマラヤから

### カンチ便り

ナマステ!!

そろそろ春たけなわですが、いかがお過しでしょうか。

今までに、エヴェレスト、Ｋ２、マカルーと、ヒマラヤの高峰を登ってきましたが、今回世界第３位の高峰カンチェンジュンガ（8,586m）に挑むことになりました。

３月15日にカトマンズに到着し、明日20日にキャラバン出発地のグンサへ、ヘリコプターで飛ぶ予定です。

今までの15回のヒマラヤ遠征の経験を生かして、５月の登頂をめざします。

とり急ぎ、出発のご挨拶まで。

３／19　カトマンズにて　ＪＡＣ隊　田辺　治

### 30周年資金協力者ご芳名

１口（佐藤健、西郡光昭、中谷正秀）

総計259名　5,659,000円（1998年４月10日現在）

### 東京集会のお知らせ

日　時　５月25日（月）午後７時～

内　容　「ネパール・ヒマラヤの手引き」発刊を祝して、ネパール談義です。

場　所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

## ■ 8,000ｍ峰

# トータル獲得標高1997

（３万メートル以上・山森欣一作成）

氏名の前の×は死亡　★＝日本人初登頂　●＝無酸素（8,500ｍ級）　↓＝登頂後帰路死亡

| 番号 | 氏　名 | 山　名 | 標高 | 登頂年月日 | ルート等 |
|---|---|---|---|---|---|
| 01 | ×山田　昇 | 1.ダウラギリⅠ | 8,167 | 1978,10,21 | 南東稜 |
| | 1950, 2, 生 | 2.カンチェンジュンガM | 8,586 | 1981, 5, 5 | 南西面 |
| | 9座12回 | 3.ダウラギリⅠ | 8,167 | 1982,10,18 | 北西稜初登攀 |
| | (101,073ｍ) | 4.ローツェ | 8,516 | 1983,10, 9 | 西面 ★ |
| | 冬期3回 | 5.サガルマータ | 8,848 | 〃 12,16 | 冬期第三登 |
| | 初登攀2回 | 6.K2 | 8,611 | 1985, 7,24 | 南東稜 ● |
| | HAT2回 | 7.サガルマータ | 8,848 | 〃 10,30 | 南東稜 ● |
| | 無酸素2回 | 8.マナスル（AP） | 8,163 | 〃 12,14 | 冬期第二登　HAT－T |
| | 冬期AP1回 | 9.アンナプルナⅠ | 8,091 | 1987,12,20 | 南壁冬期初登攀 |
| | | 10.チョモランマ | 8,848 | 1988, 5, 5 | 北→南へ初縦断 |
| | | 11.シシャパンマM | 8,027 | 〃 10,24 | 北東稜 |
| | | 12.チョー・オユー | 8,201 | 〃 11, 6 | 北西面　HAT－T |
| 02 | 名塚　秀二 | 1.サガルマータ | 8,848 | 1985,10,30 | 南東稜 |
| | 1954,11, 生 | 2.チョゴリ | 8,611 | 1990, 8, 9 | 北西壁初登攀 |
| | 6座7回 | 3.カンチェンジュンガM | 8,586 | 1991, 5,24 | 北東支稜 |
| | (59,197ｍ) | 4.チョー・オユー | 8,201 | 1993,10, 8 | 北西面 |
| | 冬期1回 | 5.サガルマータ | 8,848 | 〃 12,18 | 冬期南西壁初登攀 |
| | 初登攀2回 | 6.ガッシャーブルムⅠ | 8,068 | 1997, 7, 7 | 北稜 |
| | | 7.ガッシャーブルムⅡ | 8,035 | 〃 7,14 | 南西稜 |
| 03 | 尾崎　隆 | 1.ブロード・ピークM | 8,051 | 1977, 8, 8 | 西稜 ★ |
| | 1952, 9, 生 | 2.チョモランマ | ,8,848 | 1980, 5,10 | 北壁初登攀 |
| | 5座6回 | 3.マナスル | 8,163 | 1981,10,12 | 北面 |
| | (51,008ｍ) | 4.ローツェ | 8,516 | 1983,10, 9 | 西面 ★ |
| | 初登攀1回 | 5.サガルマータ | 8,848 | 〃 12,16 | 冬期第三登 |
| | 冬期1回 | 6.カンチェンジュンガM | 8,586 | 1984, 5,19 | 南西面 |
| 04 | 山本　篤 | 1.シシャパンマM | 8,027 | 1988,10,24 | 北東稜 |
| | 1962,10, 生 | 2.チョー・オユー | 8,201 | 〃 11, 6 | 北西面 |
| | 6座6回 | 3.サガルマータ | 8,848 | 1989,10,13 | 南東稜 |
| | (50,313ｍ) | 4.マカルー | 8,463 | 1995, 5,21 | 東稜下部初登攀 |
| | 初登攀1回 | 5.K2 | 8,611 | 1996, 8,14 | 南南東リブ |
| | | 6.マナスル | 8,163 | 1997,10, 8 | 北東面 |
| 05 | 田辺　治 | 1.ガッシャーブルムⅡ | 8,035 | 1990, 7,26 | 南西稜 |
| | 1961, 1, | 2.ブロード・ピークM | 8,051 | 1993, 8,24 | 西稜 |
| | 6座6回 | 3.チョー・オユー | 8,201 | 〃 10,11 | 北西面 |
| | (50,209ｍ) | 4.サガルマータ | 8,848 | 〃 12,20 | 冬期南西壁　HAT－T |

| 番号 | 氏　名 | 山　名 | 標高 | 登頂年月日 | ルート等 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 冬期1回 | 5.マカルー | 8,463 | 1995, 5,21 | 東稜下部初登攀 |
| | 初登攀2回 | 6.K2 | 8,611 | 1997, 7,19 | 西壁上部初登攀 |
| 06 | 小西　浩文 | 1.シシャパンマC | 8,008 | 1982,10,10 | 北東稜 |
| | 1962, 3,　生 | 2.ブロード・ピークM | 8,051 | 1991, 7,30 | 西稜 |
| | 6座6回 | 3.ガッシャーブルムII | 8,035 | 1993, 7,31 | 南西稜 |
| | (48,530m) | 4.チョー・オユー | 8,201 | 1995, 5, 9 | 北西面 |
| | | 5.ダウラギリI | 8,167 | 1997, 5,31 | 北東稜 |
| | | 6.ガッシャーブルムII | 8,068 | 〃　7,16 | 北稜 |
| 07 | ×三枝　照雄 | 1.サガルマータ | 8,848 | 1985,10,30 | 南東稜 |
| | 1957,10,　生 | 2.アンナプルナI | 8,091 | 1987,12,20 | 南壁冬期初登攀 |
| | 4座5回 | 3.チョモランマ | 8,848 | 1988, 5, 5 | 北稜 |
| | (42,015m) | 4.シシャパンマM | 8,027 | 〃　10,24 | 北東稜 |
| | 冬期1回 | 5.チョー・オユー | 8,201 | 〃　11, 6 | 北西面　HAT－T |
| 08 | 三谷統一郎 | 1.ダウラギリI | 8,167 | 1982,10,17 | 北東稜 |
| | 1958, 3,　生 | 2.カンチェンジュンガM | 8,586 | 1984, 5, 5 | 南西面　南峰～中央峰縦走 |
| | 5座5回 | 3.チョー・オユー | 8,201 | 1985,10, 3 | 北西面　★ |
| | (41,965m) | 4.サガルマータ | 8,848 | 1989,10,13 | 南東稜 |
| | 縦走1回 | 5.マナスル | 8,163 | 1997,10, 8 | 北東面 |
| 09 | 尾形　好雄 | 1.ヤルン・カン | 8,505 | 1981, 5, 9 | 南東面　★ |
| | 1948, 7,　生 | 2.チョー・オユー | 8,201 | 1993,10, 8 | 北西面 |
| | 5座5回 | 3.サガルマータ | 8,848 | 〃　12,22 | 冬期南西壁 |
| | (41,640m) | 4.ガッシャーブルムII | 8,035 | 1997, 7, 8 | 南西稜 |
| | 冬期1回 | 5.ブロード・ピークM | 8,051 | 〃　7,20 | 西稜 |
| 10 | 石川　富康 | 1.チョー・オユー | 8,201 | 1991, 9,28 | 北西面 |
| | 1936,11,　生 | 2.サガルマータ | 8,848 | 1994, 5,13 | 南稜　日本人最高齢登頂 |
| | 5座5回 | 3.ダウラギリI | 8,167 | 〃　10, 1 | 北東稜 |
| | (41,387m) | 4.シシャパンマC | 8,008 | 1995, 9,26 | 北東稜 |
| | 全て50歳代 | 5.マナスル | 8,163 | 1996, 9,27 | 北東面 |
| 11 | 江塚　進介 | 1.ブロード・ピークM | 8,051 | 1993, 8,24 | 西稜 |
| | 1961, 4,　生 | 2.チョー・オユー | 8,201 | 〃　10,11 | 北西面 |
| | 5座5回 | 3.サガルマータ | 8,848 | 〃　12,20 | 冬期南西壁　HAT－T |
| | (41,199m) | 4.ガッシャーブルムI | 8,068 | 1997, 7, 7 | 北稜 |
| | 冬期1回 | 5.ガッシャーブルムII | 8,035 | 〃　7,14 | 南西稜 |
| 12 | 宮崎　勉 | 1.ダウラギリI | 8,167 | 1978,10,19 | 南東稜初登攀 |
| | 1947,11,　生 | 2.ローツェ | 8,516 | 1983,10,10 | 西面 |
| | 5座5回 | 3.チョー・オユー | 8,201 | 1993,10,12 | 北西面 |
| | (40,987m) | 4.ガッシャーブルムI | 8,068 | 1997, 7, 9 | 北稜 |
| | 初登攀1回 | 5.ガッシャーブルムII | 8,035 | 〃　7,14 | 南西稜 |
| 13 | ×加藤　保男 | 1.サガルマータ | 8,848 | 1973,10,26 | 秋期初登頂 |
| | 1949, 3,　生 | 2.チョモランマ | 8,848 | 1980, 5, 3 | 北稜 |
| | 2座4回 | 3.マナスル | 8,163 | 1981,10,14 | 北東面 |

| 番号 | 氏　名 | 山　名 | 標高 | 登頂年月日 | ルート等 |
|---|---|---|---|---|---|
| | (34,707m) | 4.サガルマータ | 8,848 | 1982,12,27 | 冬期第二登　↓ |
| 14 | 重廣　恒夫 | 1.K2 | 8,611 | 1977, 8, 8 | 第二登　南東稜 |
| | 1947,10,　生 | 2.チョモランマ | 8,848 | 1980, 5,10 | 北壁初登攀 |
| | (33,992m) | 3.カンチェンジュンガC | 8,482 | 1984, 5,18 | 南峰から縦走 |
| | 縦走1回 | 4.ブロード・ピークM | 8,051 | 1985, 8,12 | 西稜 |
| 15 | 谷川　太郎 | 1.ブロード・ピークM | 8,051 | 1991, 7,12 | 西稜 |
| | 1967, 6,　生 | 2.ガッシャーブルムII | 8,035 | 1993, 7,22 | 南西稜 |
| | (33,160m) | 3.マカルー | 8,463 | 1995, 5,22 | 東稜下部初登攀 |
| | 初登攀1回 | 4.K2 | 8,611 | 1996, 8,12 | 南南東リブ |
| 16 | 星野　龍史 | 1.チョー・オユー | 8,201 | 1993,10, 8 | 北西面 |
| | 1967,11,　生 | 2.サガルマータ | 8,848 | 〃　12,22 | 冬期南西壁 |
| | (33,152m) | 3.ガッシャーブルムI | 8,068 | 1997, 7, 7 | 北稜 |
| | 冬期1回 | 4.ガッシャーブルムII | 8,035 | 〃　7,14 | 南西稜 |
| 17 | 後藤　文明 | 1.チョー・オユー | 8,201 | 1993,10, 8 | 北西面 |
| | 1965, 5,　生 | 2.サガルマータ | 8,848 | 〃　12,18 | 冬期南西壁初登 |
| | (33,135m) | 3.ガッシャーブルムII | 8,035 | 1997, 7, 8 | 南西稜 |
| | 初登攀1回 | 4.ブロード・ピークM | 8,051 | 〃　7,20 | 西稜 |
| 18 | 遠藤　晴行 | 1.サガルマータ | 8,848 | 1983,10, 8 | 南東稜　● |
| | 1957, 2,　生 | 2.ナンガ・パルバット | 8,125 | 1988, 7,12 | 西面 |
| | (33,076m) | 3.ガッシャーブルムI | 8,068 | 1989, 7,12 | 北稜 |
| | 無酸素1回 | 4.ガッシャーブルムII | 8,035 | 1990, 7,26 | 南西稜 |
| 19 | 戸高　雅史 | 1.ナンガ・パルバット | 8,126 | 1990, 8,18 | 南西稜 |
| | 1961,12,　生 | 2.ガッシャーブルムII | 8,035 | 1993, 7,31 | 南西稜 |
| | (32,823m) | 3.ブロード・ピークM | 8,051 | 1995, 7,19 | N～Cから縦走 |
| | 無酸素1回 | 4.K2 | 8,611 | 1996, 7,29 | 南東稜単独　● |
| 20 | 山野井妙子 | 1.ブロード・ピークM | 8,051 | 1991, 7,30 | 西稜 |
| | 1956, 3,　生 | 2.マカルー | 8,463 | 〃　10, 7 | 北西稜　● |
| | (32,750m) | 3.ガッシャーブルムI | 8,035 | 1993, 7,31 | 南西稜 |
| | 無酸素1回 | 4.チョー・オユー | 8,201 | 1994, 9,25 | 南西壁　アルパイン・スタイル |
| 21 | 吉田　文江 | 1.ガッシャーブルムII | 8,035 | 1988, 8, 8 | 南西稜 |
| | 1955,10,　生 | 2.ダウラギリI | 8,167 | 1990,10, 9 | 北東稜 |
| | (32,454m) | 3.チョー・オユー | 8,201 | 1993,10,12 | 北西面 |
| | | 4.ブロード・ピークM | 8,051 | 1997, 7,16 | 西稜 |
| 22 | 谷口　　守 | 1.ナンガ・パルバット | 8,126 | 1983, 7,31 | 西面　★ |
| | 1948,12, | 2.ブロード・ピークM | 8,051 | 1988, 8,13 | 西稜 |
| | (32,446m) | 3.チョー・オユー | 8,201 | 1992, 9,20 | 北西面 |
| | | 4.ガッシャーブルムI | 8,068 | 1994, 8,12 | 北稜 |
| 23 | 遠藤　由加 | 1.ナンガ・パルバット | 8,126 | 1988, 7,12 | 西面 |
| | 1966, 1,　生 | 2.ガッシャーブルムI | 8,068 | 1989, 7,12 | 北稜 |
| | (32,430m) | 3.ガッシャーブルムII | 8,035 | 1990, 7,26 | 南西稜 |
| | | 4.チョー・オユー | 8,201 | 1994, 9,25 | 南西壁　アルパイン・スタイル |

日本ヒマラヤ協会サマー・キャンプ

# ニンチン・カンサ（7,206m）登山計画

## ごあいさつ

日本ヒマラヤ協会は、広くヒマラヤ地域の登山・踏査・自然科学・人文科学について研究・実践する、ヒマラヤ愛好者約800名で構成し、昨年創立30周年を迎えた全国組織の任意団体であります。

本会は、1967年の創立以来インド、アフガニスタン、ネパール、旧ソ連、パキスタン、ブータン、中華人民共和国など広大なユーラシア大陸の山野を舞台として活動し、これまで登山・踏査だけでも80数隊を派遣し数多くの成果をあげて参りました。

ヒマラヤ登山熱が高まる中で、本会会員の中から身近に仲間や良きアドバイザーが居ないため、せっかくの夢を実現できない人達から、「休暇の取り易い時期」に、ヒマラヤ登山を実践したい、との希望が寄せられるようになりました。

本会ではこの要望に応えるため、1989年からインド・ヒマラヤを舞台に「サマー・キャンプ」を実施し、93年からは、中国、ムスターグ・アタ（7,546m）を加え、さらに97年から新しい舞台として中国、チベット自治区にありますニンチン・カンサ（7,206m）を選びました。岳人の誰にもある「チベットへの憧れ」と、新しい地域を目標にすることによって「未知への憧れ」をも満たせる舞台であると確信しております。また、本会の「サマー・キャンプ」は、総て結集した隊員による登山であります。現地においても隊員がルートを開拓し、荷上げを行い登頂を目指すことが原則であります。従って所謂「ガイド付き公募登山隊」とは全く異なる登山であります。

大自然の摂理は人知を遥かに越えております。

これまでの経験を充分に活用しながら、細心の注意を払い所期の目的を達成する所存であります。

なにとぞ、趣旨を御理解いただきまして皆様の絶大なるご支援を賜りたくお願い申し上げます。

1998年4月

日本ヒマラヤ協会
ニンチン・カンサ峰登山隊
隊長　関根幸次

## 計画の概要

1．隊の名称
　日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ登山隊1998年
　（ＨＡＪ Ningqin Kangsha Expedition 1998）

2．派遣団体
　日本ヒマラヤ協会

3．目標の山
　中華人民共和国西蔵自治区浪卡県／江孜県ニンチン・カンサ峰（寧青崗桑・Ningqin Kangsha 7,206m）

4．目　　的
　＊ニンチン・カンサ峰の登頂（西面～新ルートを予定）
　＊山岳自然環境の保全（テイクイン、テイクアウトの実践）
　＊日本と中国の友好親善交流

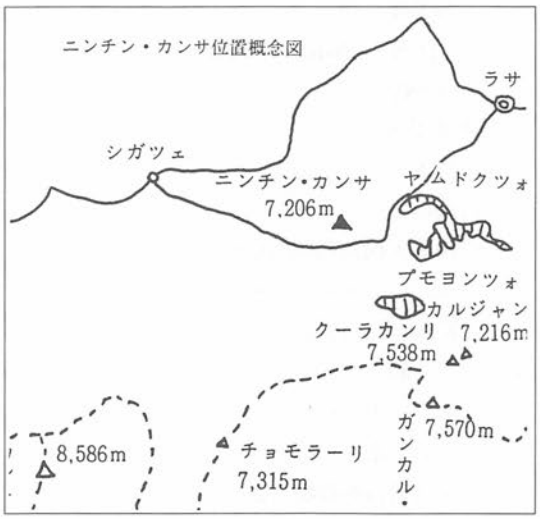
5．登山期間
　1998年7月19日～8月25日（38日間）

6．隊の構成
　関根幸次隊長以下10名

7．推進の組織
　日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ峰登山隊実行委員会

会　　長：稲田　定重
（ＨＡＪ理事長）
委　員　長：山森　欣一
（同 専務理事）
副実行委員長：関根　幸次
（同 登山隊隊長）
実 行 委 員：八木原圀明
（ＨＡＪ常務理事）
〃　：尾形　好雄（同）
〃　：寺沢　玲子（同）
〃　：中川　　裕（同）
〃　：野沢井　歩（同）
〃　：登山隊員

8．隊の事務局（留守本部を兼ねる）
〒170-0013 東京都豊島区東池袋４丁目２番７号　萬栄ビル501号
日本ヒマラヤ協会
☎（03)3988-8474　FAX 03-3988-8502
夜間：隊出発まで　関根幸次
〃：隊出発後　山森欣一



▲左端が主峰、昨年は右の稜から

## 日　程

7月19日　成田→成都（飛行機）
20日　北京→成都（飛行機）
21日　成都→ラサ（飛行機）
22日～23日　ラサにて出発準備
24日　ラサ→ヤムドクツォ（車）
25日～28日　高所順応訓練
29日　ヤムドクツォ～ＢＣ
30日～8月18日　登山期間（20日間）
19日　ベース・キャンプ清掃日
20日　ＢＣ→ラサ（車）
21日～22日　ラサ滞在
23日　ラサ→成都（飛行機）
24日　成都→北京（飛行機）
25日　北京→成田（飛行機）

## 隊員名簿

（1）生年月日　2）住所　3）勤務先　4）所属山岳会　5）高峰登山歴

隊長　**関根　幸次**〔SEKINE Koji〕
1）1933年10月　（64歳）
2）〒333-08　川口市

3）㈲ アルム化学
4）わらじの仲間
5）1984年夏　ヨーロッパ・アルプス、モンブラン(4,807m）登頂
1987年春　ネパール、メラ・ピーク(6,654m）
1989年　台湾、玉山(3,950m）登頂　他、台湾の沢、10回
1990年夏　インド、サトパント(7,075m）登頂
1991年夏　インド、ヌン(7,135m）
1992年夏　インド、ヌン(7,135m）登頂
1993年夏　パキスタン、ブロード・ピーク(8,051m）隊長
1994年夏　中国、ムスターグ・アタ(7,546m）登頂

登攀隊長　伊藤　守〔ITO Mamoru〕
1)　1954年11月　(43歳)
2)　〒133-00　江戸川区
3)　㈱ ミザール
4)　東京朝霧山岳会
5)　1989年夏　インド、ヴァスキ・パルバット(6,792m)
1991年夏　インド、ヌン(7,135m)
1993年夏　パキスタン、ブロード・ピーク(8,051m)

隊員　田村　正勝〔TAMURA Masakatsu〕
1)　1942年4月　(56歳)
2)　〒166-00　杉並区
3)　中野企画
4)　黒稜山岳会
5)　1991年夏　インド、ヌン(7,135m)登頂
1992年夏　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)
1992年夏　中国、クラウン(7,295m)
1993年夏　パキスタン、ブロード・ピーク(8,051m)登頂
1994年夏　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂
1995年夏＆1996年夏　パキスタン、クンヤン・チッシュ(7,852m)

隊員　長水　洋〔NAGAMIZU Hiroshi〕
1)　1949年7月　(49歳)
2)　〒005-08　札幌市
3)　北海道石狩支庁
4)　札幌登攀倶楽部
5)　1981年夏　ヨーロッパ・アルプス
1987年夏　インド、メルー(6,600m)隊長
1991年秋　ネパール、アンナプルナⅠ(8,091m)

隊員　武部　秀夫〔TAKEBE Hideo〕
1)　1952年12月　(45歳)
2)　〒703-82　岡山市
3)　自営業
4)　大阪市立大学山岳会
5)　1984年夏　インド、デビィスタン(6,666m)
1985年夏　パキスタン、K2(8,611m)
1989年春　中国、スークァンリ(7,308m)登頂

隊員　日南　長二郎〔HINAMI Chojiro〕
1)　1955年3月　(43歳)
2)　〒732-00　広島市
3)　三菱電機ビルテクノサービス㈱
4)　広島勤労者山の会
5)　1992年夏　インド、ドラウパディ・カ・ダンダ(5,500m)登頂
1993年夏　ヨーロッパ、アルプス
1994年夏　中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂

隊員　山本　強〔YAMAMOTO Tsuyoshi〕
1)　1955年12月　(42歳)
2)　〒061-32　石狩市
3)　NTTコムウェア㈱
4)　札幌登攀倶楽部
5)　なし

隊員　清水　久江〔SHIMIZU Hisae〕
1)　1963年10月　(42歳)
2)　〒164-　中野区
3)　神奈川県ライトセンター
4)　東京朝霧山岳会
5)　なし

隊員　岩瀬　雄二〔IWASE Yuji〕
1)　1964年9月　(33歳)
2)　〒166-00　杉並区
3)　自営業
4)　同流山岳会
5)　なし

隊員　川上　浩史〔KAWAKAMI Hiroshi〕
1)　1968年2月　(30歳)
2)　〒586-00　河内長野市
3)　自営業
4)　なし
5)　なし

## ■ 寸 感 ■

ＨＡＪ主催の「事故と環境対策研修会」も第５回目を迎えて先日終了した。ヒマラヤの事故の原因は様々である。高所障害を理解するには「体」の仕組みを勉強するのが基本である。氷河雪崩（懸垂氷河の崩落）にも様々なケースがある。クレバスに転落した場合でもザックのウエスト・ベルトを締めないで生死を分けたケースもある。

この研修会の案内状を、今夏と今秋ＥＸＰを予定している人々に30通ほど出した。その中からの参加者は「零」であった。その人たちには呉々も「こんな筈ではなかった」ことにならないことを祈るだけである。　（記：山森）

## 事務局日誌（４月）

３日（金）　朝日新聞運動部取材のため来会

４日（土）　ニンチン・カンサ隊＆ラモ・シェ隊合宿（於ルーム）
元ＩＴＢＰ高官フカム・シン氏逝去の報入る。

５日（日）　第５回高所登山「事故と環境対策研修会」（豊島区民センター 35名）

９日（木）　ヒマラヤ318号発送

15日（水）　理事会通知発送

20日（月）　海外登山情報センター設立準備委員会（於、ＪＡＣ、山森）

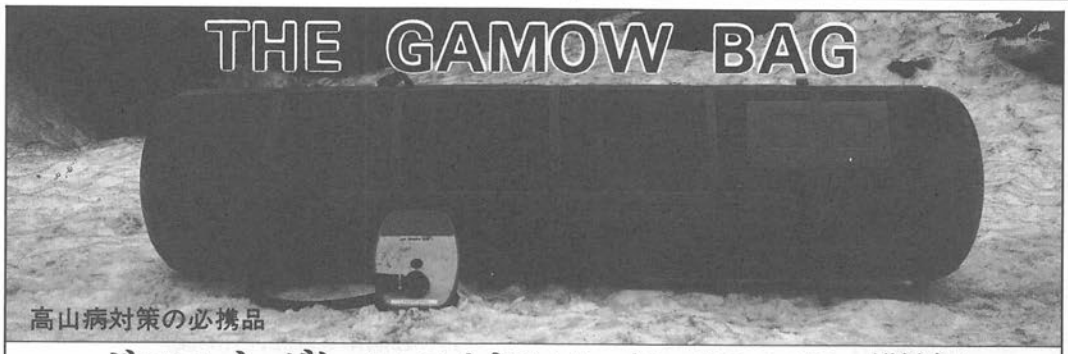
26日（日）　ベルニナ山岳会創立50周年記念祝賀会（於、横浜、遠藤、山森）

27日（月）　東京集会（10名）


ヒマラヤ No.319（６月号）

平成10年５月10日印刷　10年６月１日発行
発行人　稲田定重
編集人　山森欣一
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋４－２－７
萬栄ビル501号
電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」






ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始！

加圧しただけで約２０００ｍ下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
（血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単３乾電池４本使用／携帯型）

総代理店　：　日本メディコ株式会社
レンタル・販売問い合わせ先　：　株式会社 ティ・エッチ・アイ
〒135　東京都江東区木場２-５-７　ＫＨビル７階
ＴＥＬ：03-5245-0511　ＦＡＸ：03-5245-0510
（隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。）

**TREASURE TOUR**

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

——遠征隊、トレッキング、秘境への旅——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社 ☎03-3574-8880

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

三井航空サービス代理店2452号

個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク

キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア

株式会社 西遊旅行

東京本社　〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階　☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク　〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階　☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所　〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F　☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所　JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

## Mt. EXPEDITION SHOP

# ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601㈹
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547㈹
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301㈹
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェアー館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330
- 新潟プラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219

ICI石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004